

## 日本人の幼児における動詞構文の発達について\*

松 尾 貴 哲

### はじめに

本論は、日本語を母国語とする幼児がどのように動詞構文を使用し、その発達にどのような傾向が見られるか、そして養育者である母親との会話が動詞構文の習得にどのような影響を与えるのかを月齢を追って考察するものである。分析対象期間は2歳0ヶ月から3歳1ヶ月までとし、限定された動詞構文の使用から創造に富んだ使用まで、どのような発達の傾向が見られるかを検証していく。第1章では Choi (1999), Tomasello (1992) の先行研究を中心に、幼児の動詞構文の習得と母子会話が及ぼす影響について概観する。第3章では、データベースから抽出した幼児の動詞構文を、語順や助詞の使用といった統語的側面と、どのような動詞を習得しているかという意味的側面とに分けて分析し、その結果を考察する。また、母親のデータとの比較考察を試みながら、母親のインプットと母子会話の普遍的特徴についても言及する。その前に第2章で、本論が分析に用いたデータベースの紹介、および動詞構文の収集のルールを設定する。最後に第4章で本論を結論づけるとともに、今後の議論点を述べる。

## 1. 先行研究

### 1-1 動詞構文の使用と発達：韓国語の場合

幼児はどのように動詞構文を発達させていくのか。これらを考察するポイントとしては、実際に幼児が使用した動詞構文が日本語の文法に即した語順であるかどうか、そしてその動詞構文に主語や目的語といった最低限の情報に加え、場所を表す語、遂行するための手段、条件節などのその他の情報が含まれているかどうかを、月齢を追って調査することが1つの証拠となる。

Choi (1999) は韓国語を母国語とする幼児2人を被験者とし、1歳3ヶ月から2歳1ヶ月までの動詞構文の使用を調査した。まず、各動詞構文の文型の使用比率がどのような傾向を持っているかといった統語的側面を分析し、その結果を3つのピリオドに分けて説明している。動詞を軸にした2語文を発するようになる1歳3ヶ月ごろは構文の使用が統語的にかなり限定されていること、1歳8ヶ月ごろから動詞構文の使用に自動詞、他動詞の区別が見られるようになること、そして2歳0ヶ月を境に、韓国語の文法に即した動詞構文の使用の劇的な増加に伴って、幼児は主語、目的語という最低限の要素に加え、さらなる情報を加えて発話をするようになることを主張した。

1歳3ヶ月から1歳7ヶ月くらいに相当するのが最初のピリオド1で、動詞の数や構文の種類が後の2期と比較して少なく、その使用はかなり散発的である。たとえば、他動詞は“mekta (食べる)”, “cwuta (与える)”などに限られ、そのうち「食べる」は“mos (~できない)”, “an (~ない)”など助動詞との連結しか用いられていない。主語や目的語が表示される動詞構文は数えられる程度しかなく、“takk- (洗う)”は主語を伴ったSV構文、“po- (見る)”は目的語を伴うOV構文でしか使用されない。さらに“pwul lle (明かりを消す)”は幼児自身が寝ようとするときに、“an twey (ならない)”はジグソーパズルのピースが合わないときにそれぞれ発話されるなど、

特定の動詞がコンテキストに依存し、特定の構文で使用されると Choi は報告している。

このような動詞構文の使用は Tomasello (1992) の “verb island hypothesis” に象徴される。Tomasello は、英語を母国語とする自身の娘を長期的に観察した結果、確認された 162 の動詞のうち約半分が特定の構文でしか使用されなかったことに注目した。たとえば “break” では “Daddy break” や “Mommy break” といった SV 構文, “cut” は目的語を伴った OV 構文のみで, “hit” は SVO 構文のみでしか使用されないような偏った傾向があった。“push” と “pull” など、似た意味を持つ動詞においても、それぞれの動詞がそれぞれ異なった構文で使用され、さらには過去時制や現在進行形などの形態素もそれぞれ動詞に依存する傾向がきわめて顕著であることがわかった。このことから Tomasello は、2 歳以前の幼児は特定の動詞を特定の構文でしか用いることができないと結論づけ、その諸相が、それぞれの動詞それぞれ自体がそれぞれ異なる言語システムで構築されたような「離れ小島」のように見立てられることから、これを “verb island” の状態であると述べた。言うなれば、2 歳以前の段階では、幼児は特定の状況に依存して動詞の意味をとらえ、その動詞が初めて与えられた際に表される事象に特化した意味として解釈するということである。

Choi の分析結果によると、2 歳以前に値する 1 歳 8 ヶ月から 1 歳 11 ヶ月のピリオド 2 で、動詞構文の発話数の増加に伴って動詞構文に主語や目的語が表示される割合が増加し、自動詞を用いる際の構文は主語+動詞の語順、他動詞は目的語+動詞の語順を持つ発話が全体の約半数を占めるようになる。このことから、ピリオド 2 の大きな特徴として「幼児は自動詞と他動詞が異なるカテゴリーに属するものと理解するようになる」と Choi は結論づけた。この傾向は 2 歳 0 ヶ月、2 歳 1 ヶ月に相当する次のピリオド 3 でも続く。ピリオド 3 では自動詞と他動詞を区別した発話の数が劇的に増加し、その特徴としては、幼児は動詞構文にさらなる要素 (more element) を加えて発話をするようになるとしている。とくに他動詞構文に関してその傾向が顕著であり、目的語+動詞の語順に主語を伴った SOV 構文の発話

が多く、さらに場所を表す語が加えられた発話があったと報告している。すなわち、韓国語を母国語とする幼児は、2歳頃には韓国語の基本文型を習得し、動作主と対象物に何らかの関係を持たせる事象にさらなる情報を加え、より具体的な事象の説明が可能になっていくと考えられる。

韓国語や日本語の文法は、英語のそれとは異なる。英語は厳格な SVO の語順を保っている言語である。一方、韓国語や日本語は語順に関しても英語と比較して柔軟であり、いわゆる倒置構文など、どの語に話題の焦点が置かれるかで変わってくる。また、動詞構文において英語は原則として主語や目的語の省略が許されず、明らかに誰が動作主かという情報が共有されているコンテキストにおいてさえ、人称代名詞などを用いて表示しなければならない。日本語や韓国語では、コンテキストによって主語あるいは目的語が省略され、しばしば動詞が単独で用いられることもある。さらにこれらの言語は SOV の語順を基本構文としているので、動詞が文末に置かれることになる。Choi によると韓国語の発話の約 90% が、動詞が文末にくると報告している。

この文法的事実、日本語や韓国語において、名詞よりも動詞のほうが言語的インプットの頻度としては多いことを意味する。ある事象を説明するための言語表示が動詞構文を成している場合、動詞の意味が明らかにコンテキストで共有された情報でない限り、主語または目的語と比べ動詞の省略は少なく、「する」などの代動詞が出現することで常に概念的インプットが与えられることになる。さらに、前述のように日本語や韓国語では動詞は文末に位置するので、当該のコンテキストにおいて聞き手に注意を引きつけやすくさせる指標にもなる。Choi & Gopnik (1995) は、韓国語の幼児が習得した最初の 50 語のうち、名詞と動詞の数がほぼ同じだったと報告しており、このような見解は韓国語や日本語のみならず、たとえば中国語などのいくつかの言語では、名詞より動詞のほうが習得が早いとする見解を支持するものである。すなわち、語習得の順序は各言語によって異なり、同時にそれは母国語を適切に幼児に与える役割を持つ母親のインプットと相関性があることを意味する。幼児が動詞構文をどのように獲得するかと

いう普遍的説明の前に、各言語の使用と獲得の傾向を考察する必要性が生じる。

## 1-2 母親のインプット：韓国語の場合

一般的な見解に立てば、言語の獲得には養育者の存在が不可欠である。ジーニー<sup>3)</sup>のような人間との社会的かかわりを持たなかった子供は言語の獲得は行われず、幼児の耳に届く言語が違えば習得する言語も異なってくるのが事実である。幼児にとって母親はもっとも身近な存在であり、母子間のことばによるコミュニケーションは言語習得の引き金を与える。このことは、母親が使用する動詞構文の頻度が幼児の言語習得にどのような影響をもたらすのかに関する分析がポイントとなることを示している。

Tomasello は、動詞構文の使用と発達には母親のインプットと関係があるとし、前述の verb island hypothesis の観点から「初期の言語発達の段階において、幼児は他人が用いる特定の動詞を含んだ主語、目的語のみ使用する」と述べている (Tomasello 1992)。Choi はこの見解を支持し、それぞれの言語の特徴が動詞構文の発達に影響を及ぼすという仮説を立て、1歳8ヶ月と1歳11ヶ月2つのセッションから母親が使用した動詞構文を抽出し、幼児が使用した動詞構文と比較分析した。その結果、母親が用いる自動詞構文は主語+動詞あるいは場所+動詞が全体の半数以上を占め、他動詞構文はさまざまな文型が確認されたものの、目的語+動詞の語順が全体の約半数を占めることを見いだした。

Choi は、母親の発話が幼児へのインプットとなる要因として、母親の発話に Wh 疑問文が多いことを理由のひとつに挙げている。たとえば他動詞構文に関しては、「お父さんは何を着ているの?」「赤ちゃんは何を食べているの?」など、話題の焦点を目的語に合わせて幼児に引き出させるような発話が多く、逆に動作主を問うような疑問文は少ないと報告している。このことから、母親は子供に目的語+動詞の構文で発話をする機会を与え、基本となる SOV の構文を産出、言うなれば練習している効果があると述べ

ている。

Choi は、動詞構文の使用において語順などの統語的側面が幼児と母親で類似することに加え、主語、目的語の生物／非生物性といった意味的側面に関しても類似する傾向があるとした。母親が使用した全動詞構文のうち、自動詞構文では「寝る」「居る」といった状態動詞の場合の主語は生物と非生物であり、「行く」「来る」という行動動詞の場合はほとんどの主語が生物であった。一方、他動詞構文では主語はほとんどが生物、目的語はほとんどが非生物であった。この傾向は幼児の使用にも同じく表れていることから、母子会話における母親のインプットは、当該言語の基本構文を獲得させるだけでなく、どの動詞にどのような性質を持っている対象物を組み合わせることが出来るかという意味的な側面の獲得も同時にさせていることを立証した。

Choi の分析を要約すれば、動詞を軸とした動詞構文が確認されるようになるピリオド 1 では、幼児は自動詞と他動詞の区別など、どの動詞がどの構文で使えるのかをまだ理解していないが、ピリオド 2 の段階で、初めて幼児は文を構成するものの存在およびその働き、つまり主語、動詞、目的語の概念を理解するようになる。ピリオド 3 で幼児は徐々に verb island すなわち状況依存的な構文使用の状態から脱却を始め、動詞の種類や使用頻度も飛躍的に増え、韓国語の基本的な文法を獲得していく。この段階ではピリオド 1, 2 に比べて幼児の動詞構文の発話全体が長くなり、場所を表す語など、動詞構文において不可欠要素である主語、目的語以外の対象に注意を向けられるようになっていく。その背景で、母親の発話は幼児の言語発達に影響を与える。幼児は早期段階から母親の発話を模倣する形でインプットし、一方で母親は幼児に疑問文を多く発することで幼児に発話をするチャンスを与え、コミュニケーションに参加させようと働きかける。幼児はこのような相互作用の環境の中で当該言語の基本構文および意味関係を習得し、年齢を重ねるごとに発話の模倣から発話の創造的産出へと移行していく。

### 1-3 議論点

Choi の分析は韓国語を母国語とする幼児に特化した動詞構文の獲得の諸相を調査したものであり、英語をはじめとしたその他の言語との発達的な差異の考察を主な目的としている。韓国語と日本語は統語的側面で類似する言語であることから、Choi の分析方法およびその結果を日本語の母子会話分析に応用することは可能であると本論は考える。すなわち、日本語を母国語とする幼児は2歳を境に日本語の基本文型である SOV 構文を習得し始めると予測され、また、他動詞構文における主語は生物であり、目的語は非生物といった意味的制約の傾向など、Choi と同様の結果が出ると思われる。それは母親のインプットに大きく依存し、母親の動詞構文の使用も、幼児の傾向と類似するものと思われる。

しかし、Choi の示した3つのピリオドのうち、2歳0ヶ月、2歳1ヶ月に相当するピリオド3に関しては再考察の余地がある。分析したデータは2ヶ月のスパンのみであり、2歳1ヶ月以降の動詞構文の発達に関しては調査されておらず、このピリオドの特徴である「主語、目的語以外の要素を加えて発話をするようになる」の信憑性に乏しい。Choi は、この要素が何を指すのかについて具体的に言及しておらず、その要素が含まれている動詞構文についての考察は行っていない。「場所」以外には、たとえば「手段」「数量詞」「条件節」などが考えられるし、これらの情報を構文に加えることができるということは、事象を詳細に説明できる能力の発達の指標にもなる。幼児がさらなる要素を加えて伝達を試みるならば、その使用する動詞構文にどのような発達傾向があるのかを考察するのが本論の主なねらいである。

幼児が習得した動詞の種類に関する側面も分析する必要がある。母親の発話をインプットとするなら、語順などの統語的側面や生物／非生物の制約的組み合わせに加え、動詞自体が持つ意味、すなわち動作主と対象物を関係づける抽象的な概念も同時にインプットするはずである。各セッションにおいて母親が使用した動詞と幼児が使用した動詞の数および種類につ

いて考察することは、動詞構文の獲得というトピックを扱うには不可欠な視点である。

本論は主に以下のような点について議論を進めていく。(1) 日本語を母国語とする幼児は、2歳0ヶ月ころを境に verb island を脱却し、日本語の基本文型を獲得していくか (2) 幼児は、2歳0ヶ月を境に場所、手段、条件節、助詞などさらなる要素を動詞構文におりまぜて具体的に伝達することができるようになるか (3) 幼児は母親の発話を模倣する。母親が使用する動詞構文の傾向は、統語的、意味的側面で幼児の動詞構文の使用傾向と類似するか (4) 母子会話の特徴が幼児の動詞構文の発達にどのような影響を与えるか、である。

本論では日本語を母国語とする一人の幼児を被験者とし、2歳0ヶ月から3歳1ヶ月のスパンにおける動詞構文の使用と傾向を分析する。そして、動詞構文の語順や助詞の使用といった統語的側面と、どのような動詞を習得しているかという意味論的側面とに分け、月齢を追って考察を試みる。また、同じ方法で収集した母親の動詞構文データと比較考察することで、幼児の動詞構文の発達における母子会話の影響についても言及していく。

## 2. データベースおよび分析のルール

### 2-1 データベース

今回の分析対象となるデータは、CHILDES (CHild Language Data Exchange System)<sup>3)</sup> に掲載されている、日本語を母国語とする幼児と母親のテキスト形式の会話データである。CHILDES には幼児5人の母子会話データが掲載されており、1歳前半から3歳前半まで、月平均4セッション分の会話データがアーカイブされている。各セッションは計40分間の母子会話を記録したものであり、会話のコンテキストおよび発話の総数はセッションによって異なる。幼児と母親それぞれの発話はローマ字によって表

記され、語ごとにスペースが置かれてテキスト化されている。

本論が用いる会話データでは幼児、母親、実験者の3人が参加しているが、実験者はほとんど会話に参加することはなく、主として幼児と母親の対話で構成されている。幼児と母親の発話には中部地方の訛りがしばしば見られる。どのセッションも玩具を用いて、玩具を擬人化させたりして「ごっこ遊び」をしているコンテキストと推測される。

## 2-2 分析ルール

本論ではそれぞれ2歳0ヶ月、1ヶ月、6ヶ月、7ヶ月、そして3歳0ヶ月、1ヶ月の計6セッションを分析の対象とし、各月4セッションある中から幼児の誕生日に最も近いものを選択した。それぞれ幼児と母親の発話のうち動詞が使用されている文を抽出し、「動詞原型」「語順」「主語、目的語、助詞などの表示有無」「主語、目的語の生物性／非生物性」を分析した。

以下、分析の具体的なルールを記す。

- ・抽出した動詞の自動詞と他動詞の区別は、原則として広辞苑を基準とした。
- ・「ある」(例：荷物がある)、「ない」(例：荷物がない)、「なる」(例：大きくなる)、「できる」(例：線路ができる)、「する」(例：勉強する)、「やる」(例：こうやって、こうやる)などは動詞として判別が難しいため、今回は分析の対象としなかった。
- ・「通れ+ない」「通れ+る」などの助動詞を含んだ動詞は「通る」とカウントした。しかし自動詞「走る」+使役「させる」の場合は「走らせる」となって他動詞となり目的語を有するので、そのまま「走らせる」として他動詞としてカウントする。同じく他動詞「倒す」+受身「れる」の場合は「倒れる」となり目的語をとらないので、自動詞としてカウントする。一方、他動詞に使役がついた場合、たとえば「食べる+させる」で「食べさせる」などは、使役を考慮に入れずそのまま「食べる」として他動詞としてカウントする。

- ・「～みる」「～あげる」「～もらう」などの補助動詞は「おもちゃをあげる」や「お母さんにケーキをもらう」など、直接的に目的語を示すような独立した意味を持たない限り1つの動詞としてカウントしない。ゆえに、「持ってあげる」「持ってもらう」などは、根底となる動詞の意味が同じなので、それぞれ「持つ」という他動詞としてカウントした。「持って行く」「持って来る」などもこの基準に順ずる。
- ・「ケーキが好き」「ケーキが欲しい」など、「好き」「欲しい」は目的語を用いるので、他動詞としてカウントする。その際、目的語と動詞の間の助詞「が」は、他動詞構文において目的語の前に用いる一般的助詞「を」と同類としてまとめた。
- ・「曲がった線路」など動詞の連体形は「曲がる」として1カウントとする。「ちょっと通れないから荷物をどかす」などの複文は、それぞれ自動詞「通る」他動詞「どかす」とカウントする。また、引用節などは「荷物を持ってくる」でOV、「荷物を持ってくると言う」でさらにOVとしてそれぞれカウントする。
- ・「要らん」「食べとる」などの中部地方の方言は、それぞれコンテキストや語の意味から推測し、「要る」「食べる」と標準語の原型に直してカウントした。

### 3. 分析結果

#### 3-1 動詞構文の使用と発達：日本語の場合

まず、幼児が用いた動詞構文についての考察を行う。自動詞と他動詞の区別、および構文の語順の頻度の分析に加え、日本語特有の語である助詞、文末助詞に関しても言及する。その分析結果を踏まえ、ピリオド3の特徴「幼児は動詞構文にさらなる要素を加え、平均発話長を増やしていく」というChoiの見解を検証していく。

## 3-1-1 文型の頻度と傾向

表 1 は、幼児の使用した動詞構文を自動詞と他動詞に区別し、それぞれの語順を統計したものである。表 2 は各セッションで幼児が使用した動詞構文の平均発話長 (Mean Length of Utterance) の算出結果である。なお、本論では自動詞と他動詞両方において主語と目的語が両方とも省略された V 構文も分析の対象に入れている。

表 1

自動詞構文の語順と頻度：幼児

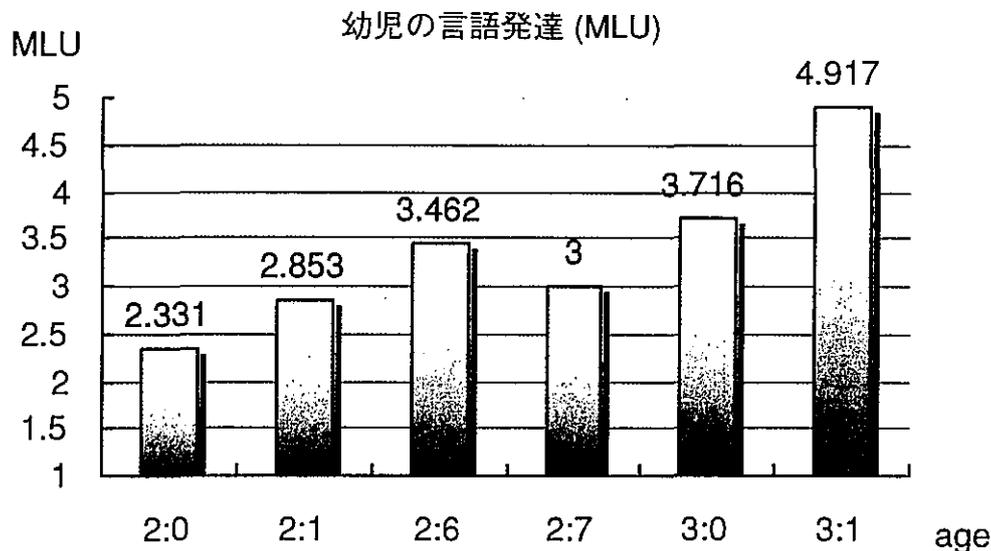
	2:0	2:1	2:6	2:7	3:0	3:1
V	39 (70%)	33 (80%)	28 (90%)	42 (72%)	35 (66%)	58 (73%)
SV	16 (29%)	8 (20%)	3 (10%)	16 (28%)	17 (32%)	21 (26%)
VS	1 (2%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (2%)	1 (1%)
Total	56 (100%)	41 (100%)	31 (100%)	58 (100%)	53 (100%)	80 (100%)

他動詞構文の語順と頻度：幼児

	2:0	2:1	2:6	2:7	3:0	3:1
V	45 (67%)	17 (49%)	21 (44%)	30 (70%)	15 (32%)	11 (41%)
SV	7 (10%)	3 (9%)	4 (8%)	2 (5%)	0 (0%)	2 (7%)
VS	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (2%)	0 (0%)	0 (0%)
OV	15 (22%)	13 (37%)	21 (44%)	7 (16%)	30 (64%)	14 (52%)
VO	0 (0%)	0 (0%)	2 (4%)	3 (7%)	0 (0%)	0 (0%)
SOV	0 (0%)	2 (6%)	0 (0%)	0 (0%)	2 (4%)	0 (0%)
Total	67 (100%)	35 (100%)	48 (100%)	43 (100%)	47 (100%)	27 (100%)

※ SVO, OSV, OVS, VSO, VOS は各セッション 0%

表 2



先行研究で示したように、Choi は 1 歳 8 ヶ月から 1 歳 11 ヶ月に相当するピリオド 2 で、幼児は自動詞と他動詞の区別ができることを述べ、その傾向は 2 歳 0 ヶ月以降のピリオド 3 で顕著に現れると述べた。韓国人の幼児が用いる自動詞構文は SV の語順、他動詞構文は OV の語順を基本としていたが、日本語を母国語とする幼児においても、動詞を軸とした二語文では SV 構文、OV 構文が好んで用いられている。しかし、自動詞構文では V 構文を使用する傾向が多く、主語を伴う SV 構文は比較的少ない。他動詞構文においても、最も多い構文の頻度は V 構文で、OV 構文はそれに順ずる。他動詞構文の使用傾向では OV 構文の使用比率が月齢を追って若干増えている一方、SOV 構文は数えられる程度しか用いられておらず、SVO などの倒置構文も含め、他動詞構文において主語と目的語が共起する文はほとんど確認できない。

全体的には 2 歳 0 ヶ月から 3 歳 1 ヶ月まで、全動詞構文の使用頻度の傾向はほとんど変化を見せなかったが、表 2 で見るように MLU は月齢を追って明らかな増加が見られる。このことは、幼児は自動詞構文において主語を、他動詞構文では主語、目的語を必ずしも表示せず、その他の語を構文に加えて発話しているという見解が生じる。

(1) 自動詞「行く」

(2:0) 行っちゃった。(V構文)

(2:7) いっぱい 行っちゃった よ。(V構文)

(3:1) ちょっと 調子 が 悪い から いけない ン です。

(V構文)

(2) 他動詞「食べる」

(2:0) 食べた？(V構文)

(2:6) これ あのう ケーキ 食べる やつ。(OV構文)

(3:0) むしゃむしゃ って 全部 食べてる よ。(V構文)

(3) 他動詞「取る」

(2:0) 取って！(V構文)

(2:6) 好き な もん 取って いい よ。(OV構文)

(4) 他動詞「持つ」

(2:0) 持って 行かない。(V構文)

(2:0) 持って って！(V構文)

(2:6) 持って ない かなあ。(V構文)

(2:7) あのう だっちゃん に 持って 行きゃあ (行けば)。

(V構文)

(1)～(4)に見られるように、2歳0ヶ月の段階では動詞単独のV構文が多い。自動詞「行く」は(1)の「行っちゃった」または「電車行く」が多く見られ、他動詞「食べる」は「食べた？」か「かっか(お母さん)食べて！」しか用いられていない。上記の例以外では、たとえば自動詞「帰る」は「うち(家)帰る」という場所+Vの構文、他動詞「作る」はSV構文あるいはV構文の使用しか確認できなかった。さらに他動詞「書く」は、目的語に助詞「も」を伴う完全に固定された構文「字を書いて！」しか発話さ

れていない。このように、特定の動詞には特定の構文、対象物しか用いられない傾向が見られることから、2歳0ヶ月の段階は verb island の傾向があると考えられる。

2歳1ヶ月ころからは、徐々に動詞構文に脱 verb island の傾向が見られた。2歳1ヶ月のセッションでは、動詞に場所を表す語が共起されるようになり、2歳6ヶ月では「いっぱい」などの程度副詞を用いたり、「脱線しちゃったから運んでって！」などの節を伴ったりする動詞構文が確認された。そのうち節を伴う動詞構文、いわゆる複文の出現頻度について分析したところ、2歳0ヶ月と1ヶ月のセッションではひとつも確認されなかったが、2歳6、7ヶ月では約13% (13/179); そして3歳のセッション、そして3歳1ヶ月では約20% (23/107) の使用が確認された。これら以外にも、幼児は月齢を追って感嘆詞、遂行手段など、主語、目的語以外のさまざまな情報を動詞構文に取り入れて発話していることがわかった。

SV 構文や OV 構文よりも V 構文が好まれるのは、動詞構文を構成する際の必須要素が主語ではなく場所を表す語を必要とする動詞の存在にある。日本語では、動作主の移動を表す動詞「行く」や「帰る」は、「学校へ行った」「家に帰る」など、主語よりも場所を示して用いられることが多い。本論の分析においても、幼児は移動を表す動詞を使用する際は「ここ行きます」など場所を表す語を共起する構文が多く、このことが V 構文の高い使用頻度に反映されていると考えられる。しかし、V 構文が頻繁に使用されているという比率は月齢を追って変わらないものの、MLU の増加という事実を考慮すれば、幼児は2歳0ヶ月以降、徐々に主語や目的語がコンテキストで共有されている情報であった場合はそれを省略し、場所や手段など、さらなる情報を伝達することが経済的かつ効果的であることを理解するようになっていくようである。

いずれにせよ、全体的に見てみると、幼児は、自動詞構文は SV、他動詞構文は OV 構文を好んで使用しており、2歳0ヶ月の段階ですでに自動詞には主語、他動詞では目的語が表示されなければならないことを理解している。日本語の基本文型はこの段階ですでに獲得されているといえよう。

### 3-1-2 動詞構文における助詞の使用

日本語特有の語である助詞は、それ自体に意味はなく、当該のコンテキストにおいて動作主と対象物との関係を明確にし、会話をスムーズかつ効果的にする語用論的な意味を持つ。さらに、自動詞構文における「が」と「に」は、動作主と場所を表す語を明確に区別するための指標となり、他動詞構文においては直接目的語と間接目的語を区別するのに「を」と「に」を的確に使い分けなければならない。すなわち、動詞構文における助詞の働きは、構文が持つ意味関係を明確に示す指標として機能することから、助詞は「さらなる要素」であるとの予測がたてられる。

しかしながら、本論で分析したところ、助詞の使用は自動詞構文、他動詞構文共に非常に少ないことがわかった。主語につく助詞は「が」「は」「も」、目的語には「を」「が」「も」、そして間接目的語には「に」が代表的であるが、2歳0ヶ月から3歳1ヶ月までの全体的な統計を見てみると、2歳0ヶ月のセッションでは全56の自動詞構文のうち主語+助詞+動詞は3発話で、3歳1ヶ月のセッションでも全80のうち6発話のみであった。また、他動詞構文における助詞「を」なども、どのセッションとも使用平均は5~6%と全体の一割にも満たなかった。

主語につく「は」は全セッションでランダムに使用された。「が」に関しては、2歳0ヶ月、1ヶ月では主語、目的語ともに使用されず、2歳6ヶ月、7ヶ月で、自動詞構文において主語につく「が」、または「何が欲しい？」という他動詞構文にその使用が確認された。目的語につく「を」は、全セッションを通して、前述の例である「字を書いて」や「～を乗せる」という固定の動詞構文での使用と、3歳1ヶ月のセッションで2つの動詞構文の使用のみであった。「に」の使用は2歳1ヶ月ごろから見うけられ、自動詞構文と他動詞構文共に「ここに」「駅に」など場所を表す語が表示される場合に用いられた。しかし、どのセッションにおいても「おばあちゃんにアイスを買ってもらおう」など、間接目的語を示す「に」はほとんど確認できなかった。

唯一「も」はいずれのセッションも比較的多く使用されていた。一般的な定義として助詞「も」は、ある対象物を付け加える意味を持つとされている。動詞構文全体として考えると、主語や目的語が新しい対象物に変わって付け加えられる一方、動詞自体は変わらない、また変わったとしても意味的に似た動詞がくる場合が多い。

(5) a おじいさんは山へ行き、おばあさんも山へ行く。

b おじいさんは山へ行き、おばあさんも川へ行く。

c?おじいさんは山へ行き、おばあさんも山で遊ぶ。

(5a) に対し (5b) は場所が変化しており、動詞「行く」は変わらないので容認されるが、(5c) は不自然であると直感的にわかる。「も」が動詞構文に用いられた場合は、直前に使用された動詞構文の基本的意味関係やシナリオがそのまま維持されることになる。すなわち、事象を説明するために動作主および対象物との新たな意味関係を構築する必要がなく、幼児にとっては認知的コストが少ないといえる。このことから、幼児は「は」「が」よりも「も」の方が習得しやすいのではないかと考えられる。

しかし、一般的に助詞は通常大人の会話においてもそうそう使用されるものではない。たとえば「俺、今日、学校、行かない」という助詞抜きの発話でも口語体として十分に機能するものである。ゆえに本論のデータにおいて助詞が少ないという結果は、助詞が習得されていないという解釈には必ずしもつながらない。前述のように、助詞の使用は語用論的な側面に強く依存するものであり、言うなれば、使用される頻度よりも、どのようなコンテキストでどのように使用されているかを考察することが当該の問題を解決するカギとなる。本論ではテキストデータ分析という性質上、実際に確認していないコンテキストから推測して分析するのは危険であるうえに、助詞が使用された発話データの数に乏しく、動詞構文における助詞の習得傾向を見いだすことは極めて難しい。データベースに表記されている助詞が実際は誤用である可能性もある。また、「は」と「が」の違いに

関しては日本語で難しい問題の1つとされており、その違いに関して現段階で明確な定説はない。これらの理由から、本論では幼児の助詞の使用と発達についてこれ以上は詳述しない。言えることは、本論で計測したMLU増加の直接的原因に「は」や「が」などの助詞は関与していない、ということである。

助詞の使用は非常に少ないという結果である一方、文末助詞の使用は月齢を追って増加の傾向が見られた。文末助詞はコンテキストによってさまざまな意味をなすと考えられている。しかし、文末助詞全てにおいて共通していることは、動詞構文が持つ意味関係に直接的な影響を与えず、その意味関係に対する話し手の「態度」を伝える機能を持っているという点である。このことを次の例で見てみる。

- (6) a この映画、おもしろいの?  
 b この映画、おもしろいよ。  
 c この映画、おもしろいね。  
 d この映画、おもしろいって。  
 e この映画、おもしろいかなあ?

(6a) は映画がおもしろいかどうかを質問する、あるいはその映画がおもしろいことに疑念を持っているという態度を表し、(6b) はその映画が絶対におもしろいという意図の強調の態度を示す。(6c) は映画がおもしろかったことに同意を求める意味が伝達される。(6d) は「この映画はおもしろい」という他人の発話あるいは信念を引用したという意味があり、(6e) は(6a)と同義であると考えられる。しかし(6)のいずれも、実際に映画がおもしろかったかどうかは別として、「この映画はおもしろい」とする軸の情報は維持される。

表 3

幼児の動詞構文における文末助詞の出現頻度					
2:0	2:1	2:6	2:7	3:0	3:1
14%	31%	55%	49%	46%	38%

幼児の動詞構文に用いられる文末助詞の種類					
2:0	2:1	2:6	2:7	3:0	3:1
よ	かなあ	でしょう	でしょう	か	じゃん
って	な	か	か	から	か
ね	よ	かなあ	かなあ	けど	から
の	から	な	から	な	けど
	ね	ね	ね	ね	もん
	の	の	の	の	な
	わ	わ	って	って	ね
		よ	わ	わ	の
			よ	よ	わ
			ぞ		よ
					ぞ

表 3 は、各セッションにおける文末助詞の使用頻度と種類を記したものである<sup>1)</sup>。本論の分析では、2歳初めから半ばにかけて動詞構文における文末助詞の使用に劇的な増加が見られ、2歳6ヶ月から3歳1ヶ月まで全動詞構文の約半数に文末助詞が用いられている。さらに、2歳0ヶ月で使用された助詞は合計4つであるのに対し、2歳1ヶ月以降では徐々に多くの助詞が出現しており、2歳1ヶ月は「かな」、6ヶ月は「でしょう」、7ヶ月は「ぞ」、3歳0ヶ月は「けど」3歳1ヶ月は「もん」「じゃん」が新たに出現している。これらの結果が意味していることは、幼児は月齢にしたがって動詞構文の発達と共にさまざまな心的態度の概念を習得していくということである。

日本語を母国語とする幼児は、2歳0ヶ月には自動詞と他動詞が異なるカテゴリーに属するものであることを理解しており、日本語の基本文型はこの段階ですでに獲得されていると考えられる。それ以降の動詞構文の発達に関しては、Choiがピリオド3の特徴として示したように、幼児は2歳ころから場所を表す語、動詞を修飾する副詞、そして複文を構成する節などの要素を加え、MLUを増加させていく。

動詞構文において「が」「を」などの助詞が用いられない一方、文末助詞「よ」「ね」などは2歳ですでにその使用が確認された。2歳1ヶ月ごろから「でしょう」や「かなあ」など、月齢を追って頻度、種類ともに増えていく傾向が見られ、3歳頃までには約半数の動詞構文に何らかの文末助詞が使用される。この文末助詞の意味は「確認要求」や「疑問」など、命題全体に対する話し手の心的態度である。「さらなる要素」とは、場所、手段、節などの情報に加え、文末助詞が伝達する意味である心的態度も相当すると本論は考える。したがって、本論はピリオド3の特徴を「幼児は2歳頃から、動詞構文に場所を表す語、動作を遂行するための手段、条件節などを加えて、その事象を明確に伝達できるようになり、その事象全体に対して確信や疑念などのさまざまな心的態度を伝えることが可能になっていく」と定義する。

### 3-1-3 動詞の使用と種類

次に、幼児が習得した動詞の種類と傾向について簡単に触れてみる。表4は幼児がセッションごとに新たに使用した動詞をリストアップしたものである。Choiは自動詞よりも他動詞のほうが習得した数が多いと報告しているが、本論の分析によると、全体的に自動詞と他動詞ほぼ同じ数を習得しており、段階的な差異はとくに見うけられない。顕著なのは2歳6ヶ月、7ヶ月の間で動詞を多く習得しているということである。

表 4

## 習得した自動詞

2:0	2:1	2:6	2:7	3:0	3:1
違う	余る	出る	開く	見える	落ちる
生える	遊ぶ	切れる	がんばる	起きる	咲く
入る	退く	壊れる	走る	立つ	足りる
はまる	挟まる	くつつく	隠れる		移る
行く	引く	曲がる	勝つ		休む
居る	寝る	座る	負ける		
帰る	降りる	倒れる	無くなる		
来る	止まる	飛ぶ	並ぶ		
乗る	着く	動く	逃げる		
通る	繋がる		登る		
	分かる		踊る		
	渡る		怒られる		
			終わる		

## 習得した他動詞

2:0	2:1	2:6	2:7	3:0	3:1
あげる	かける	暖める	はめる	囲む	引く
開ける	見る	出す	間違える	のかす	貸す
欲する	置く	運ぶ	並べる	降ろす	決める
言う	知る	貼る	教える	助ける	回す
書く	繋ぐ	被せる	倒す		思う
待つ		隠す			敷く
持つ		買う			付ける
乗せる		折る			止める
好く		しまう			
食べる		使う			
取る		打つ			
作る		読む			

また、自動詞と他動詞の主語と目的語それぞれの生物／非生物の傾向を分析した結果、その傾向はきわめて明確であった。他動詞では主語は全て生物、目的語は全て非生物であり、そのうち他動詞で主語を伴った場合はほとんどが自分か母親を指すか、非生物の物体を擬人化させて表わす傾向があった。一方、自動詞において主語は、「繋がる」「開く」など状態を表す動詞の場合は非生物である傾向が強く、「行く」「来る」など物体の移動を表す動詞では主語は生物、非生物ランダムであった。この傾向は2歳から3歳の間でとくに変化は見られなかったことから、幼児は2歳の段階でこのような制約の存在を理解しているようである。

ここで、示唆的見解として伝達動詞「言う」と心的動詞「思う」の違いについて考察してみたい。両者に共通している素性は、どちらも挿入節が聞き手に帰属する (attribute) ということである。たとえば伝達動詞「言う」は他人の実際の発話を「引用」して伝達する物理的内容の帰属である一方、「思う」は他人の信念を伝達し、その内容の真偽を問うことができない心理的内容を他人に帰属する<sup>9)</sup>。全セッションを通じて心的動詞「思う」の習得は非常に遅く、3歳1ヶ月で1発話が確認された一方で、伝達動詞の「言う」の使用はほぼ全セッションで使用され、その使用頻度も「思う」と比べれば多いことがわかった。

この事実は、幼児にとって発話内容よりも思考内容を理解するほうが難しいことを示している。発達心理学の見解では3歳を境に、他人が何を考えているか、何を信じているかを理解する心的表象 (mental representation) の理解が可能になると考えられており、たとえば「クッキーを持っている男の子」と「クッキーを考えている (思っている) 男の子」ではどちらが実際にクッキーを食べることができるかという質問にパスできるのは3歳ころだといわれている (Astington 1993)。3歳1ヶ月で「思う」の使用が確認できた本論の調査結果と年齢的に一致しているところが興味深い。

さらに「言う」は、前述の文末助詞「って」として代わりに機能し、同じく「思う」は「かなあ」と同様の機能を持つと考えられる。次の例で検証してみる。

(7) a この映画, おもしろいと (彼は) 言ったよ。

b この映画, おもしろいって。

(8) a この映画, おもしろいと思う?

b この映画, おもしろいかなあ?

(7b) が, 彼から「この映画, おもしろい」という実際の発話を話し手が直接的に引用した場合 (7a) と同義であり, (8b) において, 話し手が聞き手に明らかに質問の態度を表明している場合は (8a) と同義である。本論の分析結果にあるように, 幼児の文末助詞「って」「かなあ」は, 3歳以前の段階でも頻繁に使用されている。日本語においては文末助詞がこれらの動詞の役割を担い, ゆえに幼児の心的動詞の使用が少ないのではないかと考えられる。

### 3-2 母親のインプットと母子会話の特徴

次に, 本論で収集した母親の動詞構文の使用や母子会話一般に見られる特徴が, 幼児にどのようなインプットを与えているのかを考察する。Choi および Tomasello は, 幼児の言語習得が母親の使用する語彙や構文に大きく依存していると述べた。このような見解は, 母子会話からみた動詞構文の使用と発達にどのような傾向を生み出すのであろうか。本論では母親と幼児の動詞構文を比較考察するため, 幼児と母親が使用した動詞構文の文タイプ (平叙文, 疑問文, 命令文) を新たに分析の対象とした。

#### 3-2-1 母親のインプット: 日本語の場合

Choi の分析結果では, 母親が使用する動詞構文は, 韓国語の基本文型である SOV を基盤としており, 自動詞は SV 構文, 他動詞は OV 構文の発話が高い頻度を示していた。このような母親の動詞構文の使用は統語的インプットとなり, 幼児に基本文型を習得させる主な要因となることを主張した。

表5は、本論が分析した母親の動詞構文の文型比率を統計したものである。

表5

## 自動詞構文の語順と頻度：母親

	2:0	2:1	2:6	2:7	3:0	3:1
V	20 (44%)	52 (60%)	63 (73%)	50 (63%)	54 (64%)	73 (77%)
SV	25 (56%)	33 (38%)	19 (22%)	27 (34%)	29 (34%)	21 (22%)
VS	0 (0%)	2 (2%)	4 (5%)	3 (4%)	2 (2%)	1 (1%)
Total	45 (100%)	87 (100%)	86 (100%)	80 (100%)	85 (100%)	95 (100%)

## 他動詞構文の語順と頻度：母親

	2:0	2:1	2:6	2:7	3:0	3:1
V	41 (48%)	24 (44%)	34 (40%)	29 (42%)	19 (40%)	42 (60%)
SV	5 (6%)	4 (7%)	6 (7%)	4 (6%)	5 (10%)	4 (6%)
VS	0 (0%)	1 (2%)	2 (2%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
OV	30 (35%)	17 (31%)	37 (44%)	27 (39%)	17 (35%)	19 (27%)
VO	6 (7%)	5 (9%)	1 (1%)	5 (7%)	0 (0%)	3 (4%)
SOV	2 (2%)	0 (0%)	3 (4%)	1 (1%)	6 (13%)	2 (3%)
SVO	0 (0%)	0 (0%)	1 (1%)	0 (0%)	1 (2%)	0 (0%)
OSV	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	3 (4%)	0 (0%)	0 (0%)
OVS	1 (1%)	2 (4%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
VSO	1 (1%)	1 (2%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
Total	86 (100%)	54 (100%)	84 (100%)	69 (100%)	48 (100%)	70 (100%)

※他動詞 OVS 構文は各セッション0%

全体の統計を見てみると、各セッションにおいて最も高い頻度を示したのはV構文であり、その次に自動詞はSV構文、他動詞はOV構文が多い頻度を示した。倒置構文は幼児よりも数はあるものの、傾向として分析できるほど数はなく、単にランダムに表れていると考えてよい。自動詞SV構文の使用頻度は、全セッションを通して幼児よりも母親の方が全体的に多く、とく

に2歳0ヶ月のセッションではV構文よりもSV構文が多かった。一方、他動詞構文においては、OV構文は全体的に幼児よりも使用頻度が少ないが、これはVOやSVOなどの倒置構文が代わりに用いられているからである。

本論の結果とChoiの結果を比較して最も顕著な違いが現れたのは、他動詞構文において母親はSOV構文をほとんど使用していないということである。その使用頻度は、3歳0ヶ月で13%、その他のセッションでは平均3%にとどまり、2歳1ヶ月のセッションでは0%であった<sup>6)</sup>。この原因は、母子会話において実際に会話に参加しているのは母親と幼児の2人だけであり、第三者が話題にならない、あるいは実際に会話に参加しない限り、発話の主語は母親か幼児のどちらかであるという制約の存在にある。幼児のSOV構文の使用においてもその制約が見うけられ、他動詞構文において幼児が主語を発した場合、そのほとんどが母親自身か幼児かのどちらかであるか、あるいは「あひるさんも行く」などと、擬人化した玩具を第三者としているかであった。もし父親などの第三者が実際に会話に参加したならば、このような制約は軽減され、SOV構文の使用頻度の傾向に関してもまったく異なる結果が出ていたといえよう。

しかしながら、全体的な視点で見れば母親と幼児の使用パターンは類似しているといえる。とくにSV構文とOV構文が高い比率を示していることから、幼児は早期から母親が頻繁に用いた文型SV、OVに過敏に反応し、自動詞と他動詞がそれぞれ異なったカテゴリーに属するということをインプットしていると考えられる。この結果は、2歳以前の段階で自動詞と他動詞を区別することができるというピリオド2の特徴を強く支持するものである。

助詞と文末助詞の使用頻度については、幼児のそれと似たような結果が出た。母親の動詞構文における助詞の使用は全体の1割程度しか出現していない一方で、文末助詞の使用は非常に多く見うけられ、「よ」「ね」を筆頭に、各セッションで半数近い頻度で何らかの文末助詞が共起していた。伊藤(1990)は、幼児の助詞の誤用は4歳を過ぎても続くとする一方、横山(1990)は、幼児の文末助詞の誤用はほとんどないとしている。助詞を省略して文末助詞を頻繁に使用する日本語の会話の特徴が、幼児の助詞と文末

助詞の習得に差異を生じさせているとも考えられよう。

動詞構文における名詞の生物／非生物の傾向も、幼児のそれと極めて一致した。他動詞では目的語は主に非生物であり、主語はほとんどが生物であった。自動詞において物体の移動を表す動詞には、生物／非生物両方の名詞が表れるが、物体の状態を表す動詞には非生物がくる場合が多かった。すなわち、動詞構文の獲得において、語順などの文型獲得に加え、意味的側面に関してもインプットが行われているといえよう。

### 3-2-2 母子会話の特徴と言語習得

最後に、母子会話の一般的特徴が動詞構文の獲得にどのような影響を与えているかを考えてみる。Choi は、母親の発話には目的語を問うような疑問文が多いと述べており、このことが幼児に OV 構文を発話させ、韓国語の基本的構文を習得する引き金になると主張した。本論はこの見解を受け、幼児と母親がそれぞれ使用した動詞構文の文タイプの使用頻度を統計した。

表 6

母親の動詞構文のタイプ

	2:0	2:1	2:6	2:7	3:0	3:1
平叙文	55 (42%)	78 (55%)	89 (52%)	81 (54%)	83 (62%)	87 (53%)
命令文	24 (18%)	27 (19%)	28 (16%)	31 (21%)	16 (12%)	27 (16%)
疑問文	52 (40%)	36 (26%)	53 (31%)	37 (25%)	34 (26%)	51 (31%)
Total	131 (100%)	141 (100%)	170 (100%)	149 (100%)	133 (100%)	165 (100%)

幼児の動詞構文のタイプ

	2:0	2:1	2:6	2:7	3:0	3:1
平叙文	84 (68%)	49 (64%)	59 (75%)	78 (77%)	50 (50%)	81 (76%)
命令文	15 (12%)	21 (28%)	6 (8%)	14 (14%)	18 (18%)	13 (12%)
疑問文	24 (20%)	6 (8%)	14 (18%)	9 (9%)	32 (32%)	13 (12%)
Total	123 (100%)	76 (100%)	79 (100%)	101 (100%)	100 (100%)	107 (100%)

3歳0ヶ月のセッションを除いて、どのセッションにおいても母親のほうが幼児よりも疑問文を多く発していることがわかった<sup>7)</sup>。本論の分析では母親の全疑問文のうち主語や目的語を問うような Wh 疑問文はさほど多くは見られず、その代わりに子供のあいまいな表現を問いただしたり、その行為を行うかどうかを確認したり、幼児の注意を引きつけるような疑問文が多く見られた。

伊藤 (1990) は母子会話の特徴として、母親の発話は「質問が多い」「幼児のことばの拡張」「繰り返し」などを挙げている。幼児のことばがまだ不明瞭な時期には、不明な内容を明らかにしようとする質問をしたり、何度も同じ発話を繰り返すことでその内容の確認を行うと共に、発話の理解を深めさせようとしたりする傾向があると述べている。同じく Brown (1973) は、「ここ」などの一語文を「ここにいてほしい」と解釈するような、母親が幼児の情報不明瞭な一語文を解釈する傾向が多々あると主張している。この見解を受けて、母親の疑問文がどのような性質を持ったものであるかを実際の発話を例に考察してみる。

(9) 2歳0ヶ月

幼児 : 開けちゃ いや。

調査者 : ん?

幼児 : 開けて ××× (解釈不可能)。

調査者 : うん。

幼児 : すーちゃん (第三者) うち 帰る。

母親 : うち 帰って から 開ける って こと?

幼児 : 開ける こと。

(9) は、母親は幼児の発話「開けちゃいや」「うち帰る」に接続詞「から」を用いることで因果関係を復元し、この関係が幼児の意図したものであるかどうかを確認しようと質問していると考えられる。

(10) 3歳1ヶ月

幼児：たいしょうくん（幼児自身） さ、

母親：うん。

幼児：こっち これ、

母親：これ を そこ に 使う の？

(10) は、「これ」「そこ」といった対象物の関係を適切に解釈し、助詞「を」「に」の使用によって、動詞構文における直接目的語と場所を表す語あるいは間接目的語の明確な区別を教示しているよい例である。

(11) 2歳6ヶ月

幼児：トーマス の 本 もって ××× から ね。

母親：あれ もって きて くれる の？

幼児：トーマス の 本 これ。

母親：あ じゃ たいしょう 読んで！

秦野 (2002) は、幼児はコンテキストや話の流れを無視して会話を進めようとすることがあり、対話者である母親が、その逸脱したコンテキストを調整して会話を進めていく傾向があると述べている。幼児が唐突な発話をすることでコンテキストが変わったとしても、母親はその話題を無視することなく、幼児が切り替えたコンテキストに順応して受け答えを行う。(11)では、本を持ってきてくれるかどうかの母親の質問に対し、幼児はその本を母親に差し出す行為をとっており、質問の答えにはなっていないようである。そこで母親は幼児が差し出した本を幼児に読ませようとする新しいコンテキストを構築する。母親は、幼児が常に話題の中心や動作を行わせるようなコンテキストに切り替え、会話を切らせないように働きかけているのである。母親の使用する疑問文には、幼児の不明瞭な発話を推論を駆使して解釈し、助詞を伴うなどして構文全体の正しい使い方を教示する効果があると共に、常に幼児に発話をさせて会話に参加させようとするコン

テキストを作る効果があるといえよう。

また、全体的に見ると母親の疑問文は幼児の発話をそのまま引用して疑問文にすることが多い。たとえば、幼児が「向こうへ行く」と言った場合に「向こうへ行くの？」と言う具合である。母親が幼児のことばを繰り返すという現象はきわめて多く、日本語以外の母子会話でも多数報告されている。このことは、同じ質問を何度も繰り返すことで幼児に当該の動詞を聞かせる機会を増やし、動詞の意味的インプットを促進する効果もあると考えられる。

表 7

## 動詞の使用：幼児と母親

	2:0	2:1	2:6	2:7	3:0	3:1
幼児	22	31	36	40	35	40
幼児のみ	1	6	8	12	14	13
共有	21	25	28	28	21	28
母親	17	21	26	35	25	29
母親のみ	38	46	54	63	46	57

表 7 は、各セッションにおける全動詞のうち、幼児のみが使用したもの、母親のみが使用したもの、共有したものに分類し、数にして表したものである。各セッションで幼児のみが使用する動詞は母親のそれと比べると少なく、全体的に幼児はコンテキストで共有された動詞を主に使用する傾向がある。特に 2 歳 0 ヶ月は verb island の時期であることから、幼児が用いることができる動詞の少なさが表れている。月齢を追ってこの傾向は変化を見せ、次第に幼児のみに使用される動詞の数が増えていく。この結果は、母親が幼児と会話の焦点を合わせ、幼児が話題に参加できるようにコンテキストを調整しようとする母子会話の特徴が反映されていると考えられる。言い換えれば、母親は幼児の使用した動詞の意味関係やそのシナリオ、スクリプトをコンテキスト内で維持させようと働きかけ、幼児が構築したコンテキストを中心にして会話を進めていく。さらに、母親が幼児の発話を

何度も復唱することは、必然と話題の中で共有される語の数を増やすことになる。その結果、幼児と母親の動詞の使用傾向および種類が類似するという統計を生んでいると考えられる。

母親の発話は、幼児の動詞構文の獲得に大きく影響を与える。幼児は母親が頻繁に用いる発話に過敏に反応し、自動詞と他動詞という統語的側面に加え、主語目的語の生物／非生物という意味的側面もインプットする。母親の動詞構文には疑問文が多いということは、母親は幼児の不明瞭な文を推測したり、それを確認するために質問したり、何度も復唱したりする母子会話の特徴を表わしている。母親は幼児に能率よくインプットを与えるような環境を構築し、構文理解のための模範的発話と言語的刺激を常に与えているといえよう。

#### 4. 結論

以上、本論では母子会話から見た幼児の動詞構文の使用と発達を考察してきた。日本語を母国語とする幼児は、2歳初めの段階では verb island の傾向があるものの、この段階ですでに日本語の基本文型を獲得しつつあることがわかった。月齢に伴う MLU の増加が示すように、幼児は2歳を境に、基本的な動詞構文に「さらなる要素」を加えていく。本論では2歳頃から場所、手段、副詞、節などに加え、文末助詞の使用頻度および種類が増えていくことに着目し、幼児は2歳を境に動詞構文全体が示す意味関係に対して、推測や疑念、同意要求などの心的態度を取れるようになっていくと主張した。

このような動詞構文の獲得には、母親のインプットと母子会話の特徴が大きく関係している。幼児が獲得していく統語的な動詞構文の形つまり語順は母親の発話に依存しており、幼児は母親の使用する動詞構文をモデルとすることで、次第に統語的側面の理解を深めていく。また、母親の発話に疑問文が多く見られるという事実は、母親が幼児の不明瞭な発話を修正

し、コンテクストの逸脱を示唆する内容に対して確認をするために幼児の発話を復唱するという母子会話の特徴を反映するものである。この母子会話の特徴は、幼児にとってインプットの頻度が増えることを意味し、言語習得の効果を高める。幼児はこのような母子間の相互作用の中で、徐々に日本語の動詞構文および動詞の意味を習得していくのである。

しかしながら、言語の習得は母親の発話を正確に模倣するといった、いわゆる刺激と反応のやりとりによってのみ行われるものではない。Tomaselloは、言語の獲得は名指しや指差しといった明示的文脈においてのみ行われるという制約論者と反対の立場をとり、言語習得は他者の意図理解が大きく依存していると主張している (Tomasello 2000, 2003)。生誕後、幼児はさまざまな文化的相互作用に満ちた世界を体験し、スクリプト、シナリオ、社会的ゲームといった構造化された世界の中で、それに同調し参加するための能力を養っていく。言語というものは、大人が幼児にその社会的相互状況に参加させようと勤めるための手段のひとつである。一方で幼児は、その言語的シンボルが社会的相互作用といくらか関連があるという語用論的推論を基盤に、意図理解のためにあらゆる解釈ストラテジーを用いる。幼児はその社会的相互作用の中で大人の伝達意図を理解しようと勤めるのであり、言い換えれば、言語習得が行われる背景で、幼児は大人の「心を読み取る (mind-reading)」ための能動的な活動を常に行っているのである。

最後に興味深い研究として Shirai et al (2000) を挙げておく。Shirai et al は幼児の文末助詞の使用と発達について分析した結果、1歳半ば頃には「よ」「ね」の獲得が行なわれるとし、2歳ころから「って」「かなあ」が使用されるようになり、3歳頃に「のに」が用いられることがわかった。この獲得傾向は心の理論 (Theory of Mind) の発達に相関性があるとし、心の理論の発達の段階が文末助詞の獲得段階に比例しているのではないかという示唆的見解をしている。他者の信念理解に先立って獲得される「共同注意 (joint attention)」の理解 (Baron-Cohen 1995) は、幼児が早期から確認を要求する文末助詞「よ」「ね」を用いる事実を反映している。過去の事象を言及する能力は、2つの異なる事象を比較考察する能力に先行して獲得される

といわれているが (Astington 1993), 伝達助詞「って」は過去に発話された内容を言及するために, 片や「のに」は, 現実の結果と自分の仮定する想定を対比させるために用いられる。このことから Shirai et al は, 文末助詞の獲得は言語発達に沿って行われるのではなく, 心の理論の発達の段階に比例する認知発達に沿った順序を踏んでいくのではないかと推測している。

本論では心の理論の発達との相関性については触れていないが, 本論が行った文末助詞の分析結果は Shirai et al (2000) と類似しているという点に, さらなる考察の余地が生まれる。さらに, 本論で簡単に考察した伝達動詞「言う」心的動詞「思う」の獲得についての考察は, 心の理論の発達と言語習得の相関性について何らかの傾向を見いだせる非常に興味深いトピックといえそうである。

\* 本論文は, 国際基督教大学松井智子準教授からのアドバイスに端を発している。研究のきっかけと動機を与えていただき, 心から感謝申し上げる次第である。また, 執筆にあたって武内道子指導教授には有用なコメントと励ましをいただいた。重ねて感謝の意を表す。

## 注

- 1) Imai (2002) では, 日本語を母国語とする幼児は名詞よりも動詞のほうが理解しにくいという逆の結果が出ている。詳しくは Imai (2002) 参照。
- 2) 生誕後 13 年間, 父親によって部屋に閉じ込められ, 椅子やベッドにずっと縛り付けられて虐待され続けた少女。救出時には言語の使用はおろか二本足で歩行することすらまななかつたという。
- 3) CHILDES は 1984 年に Brian MacWhinney と Catherine Snow によって Carnegie Mellon University で設立された言語獲得研究のためのデータ共有システムである。
- 4) 今日の日本語において, 「けど」は文末に多く用いられていることから, 本論では「けど」を文末助詞としてカウントした。伝統的に「けど」は接続詞の扱いである。
- 5) Sperber (2000) はこの種の発話を「メタ表示 (metarepresentation)」としてとら

え、挿入節に相当する表示が聞き手もしくは第三者に帰属するという性質が特徴的であると定義している。詳しくは Sperber (2000) 参照。

- 6) 日本語の動詞構文において自動詞、他動詞共に V 構文の発話が最も多いことに加え、SOV 構文が韓国語のそれと較べて少ないという事実は、日本語は韓国語よりも主語、目的語の省略が非常に頻繁に起こる言語であることを示唆している。
- 7) 3歳0ヶ月のセッションで、幼児は「あれも欲しい？」など、「欲しい？」を多用している。

### 参考文献

- Astington, J. W. 1993. *The Child's Discovery of the Mind*. Cambridge, Massachusetts. Harvard University Press.
- Baron-Cohen, S. 1995. *Mindblindness*. MIT Press. (長野敬他 (訳) 『自閉症とマインド・ブラインドネス』 2002. 青土社.)
- Brown, R. 1973. *A first Language: The Early Stages*. Harvard university Press, Cambridge.
- Choi, S. 1999. Early development of verb structures and caregiver input in Korean: Two case studies. *International Journal of Bilingualism*, 3, 241-65.
- Choi, S. & Gopnik, A. 1995. Early acquisition of verbs in Korean: a cross-linguistic study. *Journal of Child Language*, 22, 497-529.
- 秦野悦子・やまだようこ編. 1998. 『コミュニケーションという謎』. ミネルヴァ書房.
- Imai, M., Haryu, E., & Okada, H. 2002. Is verb learning easier than noun learning for Japanese children?: 3-year-old Japanese children's knowledge about object names and action name. *Proceedings of the 26th Boston University Conference of Language Development*, Vol. 1, 324-35.
- 伊藤克敏. 1990. 『こどものことば—習得と創造—』 勁草書房.
- MacWhinney, B. & Snow, C. 1990. The Child Data Exchange System: Update. *Journal of Child Language*, 17, 457-72
- Shirai, J., Shirai, H & Furuta, Y. 1999. Acquisition of sentence-final particles in Japanese. In M. Perkins & S. Howard (eds.), *New Directions in Language Development and Disorders*, 243-250. Plenum.
- Sperber, D. 2000. Metarepresentations in an evolutionary perspective. Sperber, D. (ed.) *Metarepresentation: A multidisciplinary perspective*. Oxford University Press. 117-37.
- Tomasello, M. 1992. *First Verbs: A Case Study of Early Grammatical Development*. Cambridge, U.K.: Cambridge university Press.

Tomasello, M. 2000. Perceiving intentions and learning words in the second year of life.  
In M. Bowerman & S. Levinson (eds.), *Language Acquisition and Conceptual Development*. Cambridge university Press, 132-158.

Tomasello, M. 2003. *Constructing a Language: A Usage-Based Theory of Language Acquisition*. Harvard University Press.

横山正幸. 1990. 「幼児による助詞の誤用—K 児の場合—」(単著)『言語行動のバリエーション』文化評論出版, 207-29.